

## 『Haruki Murakami を読んでいるときに 我々が読んでいる者たち』

著者 辛島デイヴィッド

出版社 みすず書房

出版年 2018 年

頁数 本文 356 ページ、注 24 ページ

ISBN 978-4-622-08077-7

評者 北代美和子



「僕、翻訳学の学会に去年呼ばれて行ったんですけど、翻訳はいかにあるべきか、ということ自分を翻訳しないで論じる専門家がいますね」(柴田元幸『モンキー』 vol.12、2017、pp. 83-84)

翻訳研究者の胸をぐさりと突き刺すこのひとことに対しては、「私は、翻訳はいかにあるべきかを論じているのではない。翻訳はいかにあるかを論じているのだ」と反論する専門家も多いだろう。しかし「翻訳」、とくに文芸作品の「翻訳」出版の経験がない専門家(や大学院生)が、文芸作品の翻訳テキストを翻訳学の理論で分析・研究するのは普通におこなわれていることだし、文芸翻訳家の目から見れば、それが少々のをはずれているように思える場合がままあるのもまた事実である。

研究対象とされたテキストの翻訳者がいちばん理不尽だと感じるのは、おそらくターゲット・テキストの全責任を一手に背負わされるときだろう。翻訳にかぎらず、ひとつのテキストが一冊の本として出版されるまでには、校正者や編集者の手も加わるし、出版社の意向が関与してくることもある。原作の一部削除はおそらく100パーセント出版社(编者)の意向だろう。また評者の個人的な経験では、翻訳学の用語でいう「明示化」とか「同化作用」とか「異質化」にあてはまる部分は、校正者や編集者の意見を聞いて訳文を修正した箇所である場合が多い。ターゲット・テキストの完成に到るまでに、編集者(校正者)が果たす役割はきわめて大きい。「編集者は一人目の読者である。しかしただの読者ではない」(評者との会話 by 天野泰明 @岩波書店)なのである。それにもかかわらず、編集者(校正者)によるテキストの介入に目が向けられることはほとんどない。したがって私たちは翻訳をほめるにしてもけなすにしても、あたかもそれが翻訳者ただひとりの手につくられたかのように振舞いがちである。たとえば評者は、川端康成『雪国』の英訳で Edward G. Seidensticker が「指」を hand と訳したことを厳しく批判する者であるが、この変更は訳者本人の倫理観に基づいていたのか、あるいは出版社ないし編集者の意向を反映していたのか? 評者はだれを批判すべきかを正確に知ることのないままに、つい「サイデンさん」を責めてしまうのである。

日本のローカルな小説家だった村上春樹がグローバルな writer の Haruki Murakami になるまでを、翻訳家、編集者、出版社などの関係者(そして村上本人)へのインタビューと、関係者間で

交換されたメール、書評などの資料を通して詳細に追跡した本書は、訳文の作成において、だれがどこに責任があるのかを明確にしておき、これから村上作品の英訳テキストを研究する者が必ず参照すべき「バイブル」となるのは間違いない。評者にとって村上春樹はほぼ同世代の作家なだけに、その価値を冷静に判断するのが難しい面もあったのだが、本書で紹介されている英米の出版関係者や評論家の発言を通して、いわば外からの目で村上を評価することができたのは大きな収穫だった。

翻訳研究の視点から言えば、これまでは断片的な情報からなんとなく推測するだけだった英米における日本文学の翻訳出版の実際が手にとるようにわかり、ひじょうに興味深かった。たとえば22章(「ニュー Yorker」誌の編集指針に沿う形で訳文が改訂されていく)、25章(『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の「ヴォイス」を決定するための翻訳者と編集者の濃密なやりとり)に原著者が参入して訳文が推敲される)、27章(アメリカのマーケットに合わせてテキストの一部を削除する)、28章(潜在的読者の注意を引き、なおかつ作品の内容を正しく伝え、しかも原作者も納得するタイトルを決定する)などの章は、翻訳テキストの完成に到るまでのややこしい作業が具体的かつ詳細に描かれていて、「そうそう、私たちもここで苦勞をするんだよね」と共感する箇所も多かった。日本の翻訳出版の現場はアメリカほど reader-oriented (売上至上主義と言ってもよいのかもしれない)ではないが、やはり翻訳の向こうには日本人読者がいる。したがって読者を念頭において訳文を工夫することは、アメリカと較べればはるかに小規模であるにしても、日常的におこなわれているのであり、その作業を村上春樹というキャッチーな事例をあげて表舞台に引き出してくれたことを多くの翻訳家や編集者が感謝するだろう。ただし、たとえば原著者の訳文へのコミットメントなど、村上ならではの特殊性もある。なによりもまず村上は英語が読めるし、翻訳がいかなる行為であるのかを身をもって知る作家である。

評者はまた、この本を1冊の翻訳書としても読んだ。残念ながら、本書にはインタビューが何語でおこなわれたのかが明記されていない(読み落としていたらごめんなさい)。アルフレッド・バーンバウムは英語?村上春樹は日本語?いずれにしても大多数のインタビューは英語でおこなわれたのだろう。したがってインタビューの発言からの引用はもちろん著者の手による翻訳のはずだ。つまり「バーンバウムの語りを聴いているときに私たちが聴いている者たち」は著者でもあり、(本書の趣旨から言えば)編集にあたられた小川純子さんでもある。

実のところ、本書の文体や体裁、ルビの使用法、全体の統一感などにはときおり違和感を覚えることもあった。違和感の原因には、もちろん評者と著者・編集者の年齢差もあるだろう。英日の文芸翻訳を教えていると、昭和の日本語で育った評者と平成の日本語を話す学生のあいだの言語感覚の違いにときおり頭がくらくらしてくるが、本書でもくらっとすることがなかったわけではない。ふっと思ったのは、本書は原稿(データ)段階では横書きで書かれ、活字にするときに縦組みにされたのではないかということである。あるいは初めは横組みだったが、その後、縦に組みなおされたのか。横書きと縦書きのあいだには見た目と慣れを超えた微妙な差があるようにも感じるのだが、横書きと縦書きの(つまりは英語と日本語の)ハイブリッド感満載の本書の文体は、もしかしたら平成が終わったあとにくる日本語を予兆しているのかもしれない。未来の日本語!なんて、考えただけでもなんだかワクワクしてくるではないか。

もっともいくつかの言葉が単純に音訳されていることには多少の不満も感じた。たとえば voice。voice は英米文学研究家や翻訳家にはなじみのある概念かもしれない。しかし、一般の日本人読者にはどこまで浸透しているだろうか？「ヴォイス」とカギカッコに入れているのは日常語のヴォイスの意味ではないことを表すのだと思うが、本書では「声」という言葉も使用されている。「ヴォイス」と「声」についてひとこと説明があれば、読者には(というか、授業で voice の説明に四苦八苦している評者には)親切だっただろう。もちろん音訳が安易だとか、外来語を使うなど言っているのではない。ただ voice を「ヴォイス」とカタカナ書きした瞬間に、それは「ヴォイス」という「翻訳語」(by 柳父章)になるのであり、voice =「ヴォイス」ではないことは覚悟しておく必要があると思う。あえてこう言うのは、柳父章の言う「カセット効果」満点の「ヴォイス」が文芸評論の業界で流行しそうな予感がするからだ。

ところで『Haruki Murakami を読んでいるときに我々が読んでいる者たち』という印象的なタイトルを考えたのは著者なのか、それとも編集者なのか、あるいは著者と編集者の協働なのか？いずれにしても本文 356 ページの内容を凝縮し、ローマ字と平仮名と漢字、合せてわずか 34 文字で言いつくしたセンスのよさにはただただ脱帽するしかない。縦書きにするのが難しいタイトルをうまく処理して、目を引くデザインに仕上げた背表紙にも感心した。

.....

#### 【評者紹介】

北代美和子(Kitadai Miwako) 翻訳家。日本通訳翻訳学会理事。東京外国語大学講師。日本文藝家協会会員。上智大学大学院外国語学研究科修士課程修了。訳書に『名誉の戦場』『石に聴く』『嘘と魔法』など。

